

コロナ禍の面会制限によって、家族や関係者の情報共有が不十分となって問題が生じていないでしょうか。

先日入院相談に来院された家族は夫が脳梗塞を発症し、急性期病院に入院中で面会ができていませんでした。発症時は右上下肢麻痺と発話困難が認められ2週間が経過、「病室で言葉の自主トレを始め、足が動き出し、今日は一人で立ち上がれた。でも、手がまだ動かない。元に戻れないのはわかっているが、子供を抱きかかえられる程度には回復してほしい。そのためのリハビリはしてくれるのか?」 「今は普段着慣れない前開きのシャツを着せられている。Tシャツと短パンだったら主人らしくやる気を出してリハビリできる。ここの病院ではTシャツと短パンでもいいのか?」 「頑張っている人に“頑張って!”って励ましてはいけないとよく聞くが、どうやって励ましたらいののか……」と、不安が募っている様子が覗われました。

急性期と回復期では治療内容が変わる、服装は普段着ているもので構わない、リハビリは段階を追って患者さんが退院後必要となる活動の獲得を目指した個別的な内容となる、患者さんの心理的なサポートも一緒に考えていく——ことなどを私たちは説明しました。

すると、家族は「リハビリってどこの病院でも患者の希望に合わせてくれるのですか?」と安心と驚きをもって聞き直されました。リハビリはその方の目標に向かって進めるものです。「目標」という先を照らすものがあると、こんなにも人を安心させるものなのかと感じた事例でした。

一人暮らしをしていた高齢女性の患者さんは、右大腿骨頸部骨折後に複数のエピソードが重なり意欲低下と廃用が進み、手厚いケアを要する状態のまま入院期限が迫っていました。

担当チームは、ケアに重点を置かないと在宅の継続は厳しいと考えていましたが、家族は「自宅退院以外考えられない」という意向で、仕事をもつ次女と暮らす予定としていました。

退院に向け家族指導を始めた矢先、ケアマネジャーから施設入所を勧め

られると、家族は急な方向転換に戸惑いを隠せませんでした。もう少し入院中患者さんに会う機会をもてたら意欲を引き出すことができ、自宅退院の可能性が高まったのか、家族が初めから違った意向をもったのかはわかりません。しかし、目標を見失った家族の混乱は計り知れません。

コロナ禍での情報共有を再考し、「患者さんと家族の進む先——目標をしっかりと照らし続ける存在でなければいけない」と深く心に刻みました。

巻頭言

患者さんと家族の進む先 —目標を照らし続ける



坂田 祥子
さちこ

当協会理事 PTOTST委員会委員（東京湾岸リハビリテーション病院
リハビリテーション部副部長、作業療法科科長、作業療法士）